平成１４年度

第 5 回 大規模林道事業期中評価委員会

議　事　録

平成１５年 １ 月１７日（金）

於　砂防会館
林　野　庁

１　期中評価委員会出席者

（１）評価委員

東京農工大学農学部教授	亀山　章
東京大学大学院教授	小林　洋司
三菱総合研究所研究理事	高橋　弘
三重大学生物資源学部教授	三井　昭二

（２）林野庁

森林整備部長	辻　健治
整備課長	関　厚

（３）緑資源公団

森林業務担当理事	日高　照利
森林業務部長	楠瀬　雄章

２　林野庁森林整備部長挨拶

３　議　事

・　資料６により、新聞報道等について説明
・　資料４により、「大規模林道事業の完了後の評価の基本的考え方」（案）について説明

[意見交換]

○委員

４の①の中で、「まず、対象路線について、森林資源の状況、森林整備の実施状況」となっているのは良いと思うが、次は、単純に「交通量」としているが、交通量はワンオブゼムであり、これは、大規模林道の利用状況とした方が良いと思う。

その理由は、大規模林道の利用というのは、量だけではなく、平常時の交通とともに、災害時の迂回路、あるいは、緊急時の輸送など特殊な利用がずいぶんある。平日・休日の平常時については、交通量を一つの尺度にできる可能性はあると思うが、平常時だけではなく、異常時も併せて書くか、あるいは、併せて補足するようにするべきである。

○委員

確かに、交通量だけでは、他の交通量とも比較できないし、非常に良い意見だと思う。

○事務局

指摘をふまえ、修正したい。

○委員
　４の①の「森林整備の実施状況」という言葉は、２の最後の文章にある「林内路網の整備」ということも含めているのか。
○事務局
　４の①においては、間伐、植付といったものを想定している。
○委員
　林内路網の整備と関連して、基盤整備か進んでいるということを評価することも、大事な視点だと思う。
○事務局
　あとで説明する資料５においては、そのような視点も含めて記述しているが、指摘をふまえ、基本的考え方の文章で明らかにするよう工夫する。。
○委員
　入れておいた方が良い。
○委員
　４の③で「沿線の山村集落の状況など、社会経済情勢等の変化を把握」とあり、これは、過疎などという形の変化だが、それを、この林道ができたことによる効果という形でとらえるのは、なかなか難しい。社会変化はあるが、実際、どれだけ抑えられたかということの効果になるのだろうが、なにか目算、目途が立っているので、このように記載しているのか。
○事務局
　完了後の評価においては、要件として、社会情勢等の変化を把握し、その評価をすることになっており、この項目については一応の評価を行わなければならない。
　ただ、林業全般が厳しい状況にあり、データとしては、伐採量、造林量などは、大幅に減っているデータしかでてこない。そういった中で、林道の開設による効果をどう見れば良いのか。減少率が多少鈍化したから、それが効果と見ても良いのかどうか。数字的には悪化したデータの中で、社会情勢の変化として、どのようなデータを示せば効果を示せるのか。非常に難しい問題であり、資料として最大限集めたつもりだが、いろいろとご審議をお願いしたいところである。
　その中で、中越梼原町長が示しているように、その地域に住んでいる首長なり住民たちが、林道もしくは基盤的な施設が整備されることにより、意気込みを新たに、いろいろ取り組んでいるという姿勢の中に、一つの影響なり効果というものをおしはかることができるとは思う。数字にはなかなか出てこないが、そういうものも社会経済情勢の変化としてあげられるのかどうか。
○委員
　必ずしも、プラスということだけではなく、総合的に把握した上で総合的に判断するということではないか。
○事務局
　もう少し補足すると、後で説明する資料５の13ページに、林業専業従事者数の動きを記載している。

簡単にいうと、指摘の例に漏れず、林業専業従事者数は、林業が厳しくなっていく中で減ってきたが、ここの場合、最近10年間は増加に転じており、下げ止まって、今は専業従事者数が増えてきているといったことがある。このように、社会経済情勢面で、林業で生活している人が増えてきているという変化が見られるということを、一つの例として紹介している。

〇委員

南九州やこのあたりは、どちらかというと、少し前まで国産材の生産が伸びてきたところであり、製材所も増えてきている。ある地域のデータとしては、このような例が出ているが、多くは、そうではないと思う。

そのようなことがあり、資料４で、一般的にどう言うかは難しい。

〇事務局

ある意味では、日本の林業地域でもっとも優等生の場所なので、こういうことが言えると思う。

〇委員

紀伊半島の方では、ヒノキなどの材価が高く、一時期まではなんとかやっていたが、量はもう減っている。しかし、こちらは量が、ある時期まで増えている。スギの生産量は、一度減って増えている。また、今は減っているが、南九州から四国といったところは、 地域的な特性のようなものがある。

〇委員

また、変えることもあるかもしれないが、一応、基本的な考え方ということで、ここはこういう形ではないか。

〇委員

環境のことは、４に記載していない。１には「事業の実施による環境の変化及び社会経済情勢の変化等について評価を実施し」と書いてあるが、これを受けた部分が４に無いので、４の③の中に、環境の変化又は環境への影響というものを入れなければならないと思う。

〇事務局

今、指摘のあった、林道を建設することによって環境がどれだけ影響を受けたかということについては、事前の調査データが無い場合が多い。林道が造られた部分については、森林状態が森林でなくなったという事実はあるが、どの程度改変されたかは、なかなか分かりにくい点がある。

一方、客観的に見ると、森林資源の状況の中で、未立木地だったところに木が植えられるようになったり、広葉樹林が針葉樹の人工林に変わったということについてデータを押さえることができる。

そういうことで、考え方としては、①の森林資源の状況の観点、③の社会経済情勢等の中で読めると考えていたが、指摘を踏まえて検討する。

〇委員

著しい環境の変化があったかどうかを、ここに入れておいた方が良い。

方法としては、金をかけて事後調査を行うのではなく、所管する地方建設部あるいは管理する市町村に対し、苦情、届出等何かがあったということである。無

ければ無いでそれは事実なので、それだけは言っておく方が良い。
○委員
　要は、自然環境がどのように変化したかという話ではなく、何が問題にされたかということである。それがどうなったかということを、きちんと記載しないといけない。
○委員
　まず、一番重要なのは法令、条例等への抵触があったかどうかである。それから、環境アセスメントを実施していれば、その内容と著しい差異があったかどうかである。それらを見るために、届出関係、苦情など関係者からの申し出があったかどうかということを書いておく必要がある。
○事務局
　③のところで、環境の変化及び社会情勢等の変化について評価を実施しているという形に直した形で検討したい。
○委員
　その他に何かあるか。
○各委員
　なし。
○委員
　それでは、基本的考え方については、指摘された文言については、事務局の方で整理していただきたい。

・　資料５により、東津野・城川線について説明

［意見交換］

○委員
　今回説明のあった41.9キロメートルだけなく、本来は、大規模林業圏開発林道なので、そういう視点で見るのが大事なではないかと思う。そういう観点からは、この路線だけを見るのではなく、もう少し、トータルにこの地域全体を見るような視点も持っておくことは必要だという気がする。
　今日は、これだけの説明をしてもらったが、これから、大規模林業圏開発林道の完了後の評価を行う時には、もう少し広い観点から、全体の路線を眺めながら見るという方法ができると良い。
○事務局
　ここの地域は、造林事業、間伐事業だけでなく、林道事業においても整備の進んだ地域である。資料６に、１ヘクタール当たり48メートルの路網密度が実現とある。一方、今回の資料５は、現地で確認されたもの、航空写真を使って確認されたもので路網密度を計算して提出している。
　日本で一番路網密度が高い地域は宮崎県の諸塚村で、大規模林道を基幹的な林道として、各種作業路、作業道を入れ、現在１ヘクタール当たり51メートルとな

っている。こうした結果、生産性が上がり、東北では秋田県を除いて宮崎県のスギが出回っている。また、先般は、中国に100万立方メートルのスギを輸出するという状況になっている。
　梼原町も同じように、非常に生産性が高く、先般、東京浅草で材の展示をしている。
　いずれにしても、造林、林道、間伐という点から、資料等を集めて説明したい。
○委員
　大規模林業圏という観点からすると、利用区域の位置づけはどうなっているのか。
○事務局
　大規模林業圏全体の中で、梼原町の森林面積は２万１千ヘクタールであり、一方、利用区域は、路線全体で７千７百ヘクタールである。だから、この利用区域から波及して、町全体にそれだけのポテンシャルが出てきたと言えるのではないか。そういう意味で、先ほどの梼原町というのは、大規模林業圏と置き換えてほしい。
○委員
　もっと広域的に、この地域の位置づけという見方を持つことが大事ではないか。と言うのは、東津野・城川線は、なぜ、ここからここまで、このような線形をしているのか理解できない。どこからどこへ行く林道なのか分からない。全体の流れがあるのではないかと思うが、そのような説明があると良い。
○事務局
　小縮尺の地図を見ると、一つの線は右上の吾北村から東側を通り、大正町を経て、中村市を通り、清水に行っている。それから、もう一つの方は、西側は野村町を通り、日吉村から小田町の方に抜けている。ここは、この交点になっている。また、柳谷村を通って、小田町の方に抜けていくルートもあり、これら３線が交差する場所になっている。
　このような計画なので、この路線から着手して、周辺に伸ばしていこうという発想で着手した経緯があると思う。
○委員
　そのような全体のことを理解しておきたい。
○事務局
　次回、もう少し広いエリアが見られる図面と、各路線の事業の進捗状況、それから、どの程度のエリアをカバーして、どの市町村を結んでいるのか、どのような経済圏域を結んでいるのかということについてのデータを示したい。
○委員
　そういうことを見ておくことは、大規模林業圏開発林道の路線を見る時に大事な視点になる。
○委員
　ここの工事は、昭和48年度から始まっている。30年前と今とを比較して、本当に良いのかどうか、資料を読みながら悩んだ。30年前の我が国の経済というと、

非常に右肩上がりであり、黙っていても、このような整備効果は果たすものと考えられた。そのような、外生要因で自然に成長があり得るものを、どうやって補正して、この大規模林業圏開発林道の開設効果に結びつけていくのか。本来ならば、そうしなければならないが、いろいろ資料を見ても、難しいと思う。暫定的な考えとして、平成８年度に開通しているので、平成８年度時点との現在との比較ができないか。

例えば、平成８年度までに木材工場が結構できているのであれば、それは、ネットワークが完成したという効果というよりも、むしろ、社会的情勢によって木材にシフトした政策がとられたからということも読みとれる。あるいは、平成８年度以降に急に増えたとすると、路網が完成されてから効果が発現されたという、そういう見方もできる。あまりにも３０年というスパンが長すぎるので、中間の評価の指標ができないかと思う。

○委員

森林資源の整備状況の経年変化もあるだろう。

○委員

一番、端的なのは、道路ができると、箱物ができやすい。だから、木材工場が開通前にできているのか、後にできているのかということである。

それから、道路ができれば、森林総合利用が進んでいくと思うので、天狗荘のようなものが、平成８年以降の地図に載るか、あるいは、拡充されたかということである。

○事務局

指摘を踏まえ、時系列的にどのように整備されたのか整理したい。

○委員

それは、森林整備を含めてということか。

○事務局

データとして取りそろえられるかどうか、いろいろ当たってみたうえで、全体を整理してみたい。

○委員

例えば、３ページの林道等の整備は、30年弱で結構進んでいる。特に、作業道は、先ほど説明があったが進んでいる。また、製材工場も同様である。

数字が目立つから作業道を例にあげるが、地域の関連町村で、単に数字だけの問題ではなく、なぜ、作業道を基本として整備が進んだのか。もう少し構造的なもの、こういう数字が出た原因は何かを調べないといけない。

先ほどの中越梼原町長の文章を読んでも、「大規模林業圏開発林道が」とは書いていない。林道の整備は進んだ、森林の整備が進んだということであり、その辺は、揚げ足を取られないような書き方をしないといけない。

特に、ここは、国内では、ビルト化している地域であり、だから、林業的には良い数値がでる。

林業労働でも、2000年までの10年間でプラスのところは、本当に数少ないと思うが、ここは、そういう地域である。

そのことをある程度説明して、大規模林業圏開発林道とすべてが結びつくわけではないので、文章に書くなどしないと、全部手前みそではないかという非難、批判が出てくるおそれがある。

○委員

データの積上げが難しければ、期中評価の検討資料にある「こういうことを期待したい。よって必要である。」といった関係者の意見を、完了後の評価にも入れられないか。行政関係の意見、受益者の方々の意見、それと一般の方の意見というのを入れられないのか。

定性的な記述で、例えば、「ネットワークに利便性が増した。」、あるいは、木材加工業者であれば、「工場への輸送が非常に短くなった。」、一般住民であれば、「観光、レクリエーションもあるし、日常の通勤、通学に便利になった。」など、そういうものを少し入れておくような項目もあった方が良い。

○委員

ものの見かたが、この路線の受益地に限定されているが、本来は大規模林業圏という見かたで見ていたはずなので、もう少し見かたを広げたほうが良いと思う。ある区間のある部分を見るときには、その道路に対する受益地を限定的に見るが、やはり、広域的な道路をつくる視点から、もう少し見ておくことが大事なことだと思う。

例えば、ここで実際にあったかどうかは分からないが、どこかの道路が土砂崩れで通行止めになった時に、大規模林業圏開発林道が迂回路として大事だったという話は時々出てきている。また、救急患者が出た時に、大規模林業圏開発林道を通ってうまく助かった人がいるという話も無いことはない。そのような、広域的に結んだことによるメリットは、いろいろな形で拾っていけると思う。

○事務局

指摘を踏まえて、データなどに当たってみたい。

○委員

あまり数字で拾おうと考えなくても良いと思う。こういうことがあったということが、たいへん大事なことである。

○事務局

分かった。

○委員

２ページの交通量調査結果について。これは、特定断面交通量しか書いていない。道路の開設効果は、断面交通量だけではない。一番大きな道路の効果は、時間短縮と、走行距離短縮である。

だから、この説明の前に、こことここを結び、梼原とどこそこといった主要な交通の流れに関して、建設する前に比べ、時間がどの程度短縮できる、あるいは、距離がどのぐらい短くなる、ということも入れておいた方が良い。

断面交通量は、365日の一端を採っているだけである。道路特性、道路が実現した時の特徴を入れて、交通の流れ、あるいは、ネットワークという形で記載をして、ちなみに断面交通量を採るとこうだったと言うべきではないか。

○委員
　調査するのなら、例えば、トリップ長がどのぐらいかということを入れれば、非常に広域的に良い道だということが分かってくる。
○委員
　これは、どこか外部に委託して調査を行っているのか。
○事務局
　そのとおり。
○委員
　それなら、委託先に指示してやらせればいい。それほど手間はかからない。コメントを書かせれば良い。
○委員
　どこからどこまで行くか、現地で、通行する方に止まって頂いて聞いてもできると思う。
○委員
　そのとおり。できると思う。
○事務局
　指摘を踏まえ、その辺りのデータを整備する。
○委員
　あるいは、今後、現地へ行くので、そのときに聞いても良い。今度は、我々が聞くという方法もある。また、全体的な効果ということで、年間を通して思い出してもらうという方法もある。
○委員
　書き方については、最初からデータを示すだけではなくて、どのようなメリット、時間短縮があるかとかいうことを説明した方が良いということではないか。
○委員
　そのとおり。それを調べきれなければ、最後に、関係者のコメントの形で、聞き取った結果を書けば良い。地元の方々が「非常に便利になった。」と言ったら、どうして便利になったのかとたずねる。そうすると「どこそこへ行くには、便利になった。」と言うだろう。あるいは「いざというときに、消防車が入りやすくなった。」と言うかもしれない。
○委員
　利用状況は、必ずしも交通量だけではない。
○事務局
　例示的に言うと「この東側の線は、高知市、須崎市、中村市方面から、天狗高原へ向かうときのルートとして、距離何キロ、時間何分短縮したという効果がある。」と、ここではそのように述べるべきという趣旨か。
○委員
　そうすると、休日の通行台数も連想できる。
○事務局
　指摘の趣旨は分かった。

○委員
　４ページの「森林資源及び森林整備の実施状況」については、非常に効果があったということが書いてあるわけだが、これについては、先程の議論を踏まえ、時系列的にもう少し細かいデーターがあるかどうか調べてほしい。
○委員
　４ページから５ページあたりに関係するが、説明を聞くと、人工林を増やすことが冒頭に持ちだされているが、30年前の時代感覚のようだ。やはり、間伐などの問題が冒頭に持ちだされるべきであり、また、人工林の説明をするときは、むしろ、未立木地の減少についてまずふれるべきである。一般的に、天然林を拡大造林するのと、未立木地に造林することは、だいぶ違う。
　資料４の基本的考え方の大きな前提のところで、けっこう公益的機能を出している。そうであるならば、森林整備に対する考え自体も、やはり30年前と同じでは困るのではないか、という気がする。だから、間伐、保育などが頭に出てくるのであり、数字のつじつま合わせのような話になるが、間伐は結構ウエイトが高かったので、むしろそういったことがメインとなるのではないか。人工林が増えるということは、必ずしも、公益的機能では説得性が持てないので、あえてふれるのなら、先ほど説明のあった、未立木地がこうなって、こういう効果がある、という話ではないか。
○委員
　だから、平成８年か９年の情報を入れるべきである。平成８年か９年からは、それほど変化は無いと思う。それで分かると思う。
○委員
　もう一つは、人工造林は、再造林なのかどうか。やはり、拡大造林は、特別な場合を除いて、もういいが、逆に、再造林がうまくいっておらず、放棄されているという、そのあたりの視点も人工造林について必要なのではないか。
　「公益的機能を先頭に持ってきている、今の時代の森林整備とは何か。」という発想で、説明を組み立てることが必要なのではないか。
○事務局
　完了後の評価の結果は、取りまとめて公表するので、その際に検討したい。
○委員
　木材産業の方で効果が上がっているということか。森林総合利用施設も、利用者が年間18万５千人に増加しているということが指摘されている。
○委員
　やはり、森林の総合利用施設にも効果があるのだろう。それから、日吉村原木市場も平成10年に設立されているので、このあたりは、大規模林道の全通を意図しながら、整備を進めてきたということになるのではないかと思う。
○委員
　７、８ページについて、農畜産業や森林の総合利用に関する効果についてふれているが、この道路を林道としてつけたために、路線設定などに無理があるということはないのか。

○事務局
　大規模林業圏開発林道は、森林の整備のための林道であるとともに、林業以外の産業の振興のためのものであると緑資源公団法において定義されている。
　森林整備のための林道とは、林道の原点であって、大規模林業圏開発林道においても、そこを厳しく、何回も何回も検証しているところである。
　なお、先ほどの梼原町長の記事の説明について補足するとすれば、梼原町内の東側の方は、平成８年よりずっと前にできているので、それからの梼原町としての課題は、基幹的な林道はほぼできたので、これからは作業道を中心に路網をつくるというのが、梼原町長の立場となっている。
　それから、その他産業への波及について、風力発電は、大規模林業圏開発林道を使った施設である。これに似ている事例としては、岩手県の八戸・川内線の葛巻町の風力発電がある。２車線の林道なので、大きなトレーラなどで、いろいろな機材を運ぶことができたということを聞いている。
　それから、森林整備以外の効果について、もう少し検証していきたいと考えているが、入手できるデータが非常に少ない。
　また、作業道の実績、作業道台帳、間伐の市町村ごとの実績、それから、植栽の実績は、県の担当部局もいくつかに分かれ、集めるのが大変ということがあり、現時点ではこれだけだが、データを体系的に集め、次の委員会にできるものはすべて報告したい。
○委員
　今回評価する路線は、ほとんど民有林で、ほとんど人工林だから、どうしても林道周辺の施業というところに目が行く。しかし、路線によっては、ほとんど天然林で、全部保安林というところがあったりする。今回が１回目なので、これが後々のモデルケースになるかもしれない。だから、そういうこともきちんと考えて取りまとめるべきであり、なるべく幅広く見るべきであると思う。
○委員
　視点は、基本法、基本計画の流れをみながら、今回の財務省の予算措置で22パーセントアップするぐらいなので、森林整備にあると思う。森林整備というマクロな課題を達成するためには、森林社会、山村社会に足腰をつけておくことが必要である。そのためには、大規模林業圏開発林道などの交通体系が必要ですよというのが、地元の方々の要求ではないかと思う。
　森林整備の中で、木材生産に供するものについては、木材生産を活性化させるし、必要とする加工施設などに設備投資していく。また、作業道や大型機械への投資がある。機械が入らないところについては、支援部隊を作っていく。人作りである。
　それと同時に、豊かさを構築するうえでは、他の森林資源を有効に使う。それは、土地的な資源もあるし、立木資源もあるし、環境材としての資源もある。森林は、多様な機能を発現するので、多様な機能を取り出して、入込み数を増やすなど、社会に還元していく仕組みをつくっていくのが、これからの森林整備ではないかと思う。

このようなことを念頭に入れたまとめ方をしていくと、他の路線の評価でも使えると思う。ただ、今の林道の規程などに抵触するところが課題として残って、いずれ解決しなければならないところがでてくるかもしれないが。

○委員

10ページの歩行距離の短縮効果は、大規模林業圏開発林道だけのものか。路網全体の効果なのか。

○事務局

これは、本路線部分のみの効果を試算している。

○委員

13ページの、不在村地主の森林所有面積というのがずいぶん多いが、母数が何に対してこの結果なのか。不在村者森林所有面積が、昭和45年は6,540haで、平成12年には9,096haへ増加しているというのは、どのくらいの面積の中なのか。ずいぶん増えているが。

○事務局

これは関係町村の森林面積が分母であり、具体的には、４ページの上の表にある７万８千ヘクタールである。

○委員

これは、少ない方ではないか。不在村者森林所有面積は、1990年の場合、全国平均で私有林面積全体の22パーセントくらいだった。

○委員

これだけ人工林のある林業地帯でこうなっているというのが不思議だ。どうでもよい森林が不在村になるということがけっこうあるのは知っていたが、ここではずい分高いと感じた。

○事務局

今から22年前、この地域では耕作放棄地が非常に多かったので、それがどうなっているのかということで、現地調査を実施した。

田畑をそのままにして、高知市なり都市に行くが、その時に、ただ田畑をそのままで放っては行けず、すべて植林してから行くということが多く見られた地域であった。昭和45年から55年の10年間、高知県の農地面積の約２、３割が耕作放棄になっていて、特にこの地域は多い地域だったと思う。

したがって、その不在村者がすべて最初から森林所有者かどうかは確認できないが、かつては農業者であって、一時植林をし林業をやって、不在村になったということかと思う。

○委員

そうすると、森林の増加がけっこう多いので、実質的には農地がこの２、30年の間に相当森林になっていると思うが、それは、なかなか統計的には出てこない。役場などに行っても「統計上ありません。」ということで、結局現場に行って話を聞かないと分からないことが、ここではきちんと統計として出ているわけである。

○委員

林業専業従事者は増えているが、第３セクターなどを設立しているのか。

○委員
　303名から386名という、この数はすごい。どのようにがんばったらこんなに増えるのか。
○委員
　これは、世界農林業センサスの林業専業従事者、150日以上の従事者の数か。
○事務局
　そのとおり。
○委員
　そうすると、これは従事者というよりは労働者、雇われている人の数字になる。これは驚異的だ。
○委員
　どういう努力をするとこうなるか。
○委員
　若い人のＩターンが、けっこう入っているのではないか。
○事務局
　６ページに、柳谷村の取組について記載している。40名の若手を久万町が設立した「株式会社いぶき」に受け入れたということで、こういうものが弾みになって労働力の増加として数字に出てきたと思う。時系列的に、どの程度の人がどういう形で入ってきたのかは、分かる範囲で調べてみたい。
○委員
　「いぶき」については、久万町の本体ではなくて、柳谷村の部分か。全体だと５町村だったか。元々は久万町だけだったが。
○事務局
　これは「いぶき」全体の数字である。数町村の共同出資ということになっているので、この40人は全体だから、これだけで説明できるものではない。
○委員
　梼原町では、このような労務の組織はあるのか。
○事務局
　森林組合の作業班で通年雇用の取組が特に進んでいるということで、通年雇用月給制で職員同等待遇の作業班として、ユースフォレスターというものを平成５年から始めていると聞いている。
○委員
　その人数は何人か。
○事務局
　平成12年度末で14人となっている。
○委員
　11ページで「地域経済への影響の一部」という書き方をしているが、これは遠慮していると思う。これは、要するに生産額に当たるような話である。ここで評価する場合、普通は、始まりと終わりで、この間が30年あるから難しいが、どれだけ増えたのか減ったのかという話になるが、そのときのベーシックな資料にな

る11ページの二つの数字をどう調理するのかはむずかしい。これは、参考資料としてこのような調子での数字を出すという考えだろうと思うので、私が調理の仕方を提示しなければいけないのだが、むずかしい。ここはプラスで出てくるが、日本の山村の多くは、こういう数字を比較すれば、デフレートしてもマイナスで出てくる。

○事務局

　これは、30年前と比較するということになると、物価調整などをしない形で出せば、生産量はずっと多かったし、木材価格も現在より高いわけだから、小さくなっている。

○委員

　ここは、増えているかも知れない。

○事務局

　主伐量が下がってきているというのは事実かと思う。５ページに記載しているが、関係町村の主伐量は、30年間に４割くらい減少して、現在は1970年レベルの約６割とみられる。そういうことがあるので、トレンドで比較すると減退をしている。

○委員

　多分減っている。

○委員

　間伐が増えている。素材生産という形であれば、間伐も主伐も含めて一番ネットな形で木材生産が出てくる。

○事務局

　間伐は、面積という形で把握されているので、これに適宜係数をかければ、材積に換算できるるかと思う。

○委員

　町村ごとの素材生産量は分からないのか。

○事務局

　統計資料としては難しいところがあると思うが、統計法に基づく統計ではないものを含め、照会してみる。

○委員

　13ページでは、農林業センサスの1970年と2000年の資料を記載してあるが、参考資料の11ページの情報を見ると、これは住民台帳の資料ではないのか。できれば、本文で採用している年度の情報も入れてほしい。

○事務局

　これは、国勢調査などから採っているもので、年度を合わせた形で整理をする。同じ並びでデータがとれるかどうかという問題があり、多少ちぐはぐになると思うが整理する。

○委員

なぜそれを言ったかというと、この表を見ると、特に東側の路線の木桑や横貝の住民数が増えている。そこで、木桑は、平均的な１世帯当たりの人数が3.4人なの

で、若い世代が移ってきて増えているような感じがする。じっくり見ると、林道のそばに家ができているかも知れない。そういうことが、表から読みとれそうな感じがしたからである。情報があれば、それを見て分析した上で現地に行きたいと思う。

○事務局

現地にということもあったので、この部分については、現地調査に間に合うように整理したい。

○委員

この表を見ると、平成７年から14年にかけて住民が増えているところで、かつ、１戸当たりの住民数が多いところは、必ず子供がいるということであり、だから新しい世代ではないかと思う。要するに、担い手がいるということである。そういう方々がどこに住んでるのかというのを現地調査で見ると、意外な効果が出てくるかも知れない。

○委員

最後に、今後の課題等について、取り付けの問題は、大きな問題だが、何か計画はあるのか。

○事務局

関連する道路の整備の計画については、12ページの備考欄に書いている。例えば、終点の村道日向谷線については、平成15、16年度に舗装する計画である。幅員は、すでに整備されている。

東側と西側をつなぐ県道は二つあるが、現在、四国カルスト公園線は進捗率８パーセント、野村柳谷線は進捗率42パーセントということで、それぞれ整備中である。全体の整備計画、残りをいつまでに整備するという、全体の整備計画はないが、実際に今年度も整備を行っており、例えば、野村柳谷線は14年度に350メートル整備し、15年度は280メートルほど整備することになっており、こつこつ整備をしている状況である。

○委員

委員会としては、課題というより指摘であり、整備する必要がある。

○委員

14ページの最後の３行が分かりにくい。「路線完成にともなう隣接路線の完成は不可能であるが」というところをどう読むのか、よく分からない。漠然と読むと「路線はできたけれどもつながらない。」と言っているようで、どうしようもないように受け取れる。誤解を与える。

○事務局

ここは、国道にはつながらないが、国道の旧道である村道につながって、これは幅員が７メートルあるわけで、舗装して整備する。この村道は、一方で、大規模林業圏開発林道日吉・松野線につながり、この日吉・松野線が現在の国道に接続するということである。

○委員

それを書いておけば良い。

○委員
　その上の３行を含めて。
○委員
　村道の規格が大規模林業圏開発林道と同じなら、「同規格の村道」と書けば良い。
○事務局
　西側の交通量が少ないが、その大きな原因として、現状では入口が入りにくいということがあり、敬遠されているのではないかと考えている。「交通量が少ない」との指摘があるが、入口のところがまだできていないためであり、これをつなげば入りやすくなると思われるので、このような表現になったが、委員の意見も踏まえ、正確に記載したい。
○委員
　これは、今後の課題ではなく、評価結果だ。
○委員
　全体的には、これで良いか。
○各委員
　異議なし。
○委員
　それでは、本日指摘のあった点について、次回までに整理してほしい。
○事務局
指摘を踏まえて整理する。

（以上）